

[研究ノート]

組織論で読み解く

江戸時代 (10)

遠田雄志 / 小川 格*

目次

はじめに

I. 組織としての江戸時代

1. 組織の常識

- 1.1 鎖国
- 1.2 米本位制
- 1.3 参勤交代
- 1.4 世襲と身分制度 (以上第46巻4号)

2. 成長ゆえの衰退

- 2.1 武士が武器を独占した社会
- 2.2 家康を支えた譜代家臣団
- 2.3 徳川幕府の金、物、人
- 2.4 譜代筆頭井伊家の誇りと挫折
(以上第47巻1号)

3. 変化の気づきと互解

- 3.1 海外事情
- 3.2 田沼意次
- 3.3 蘭学者たち (以上第47巻2号)

4. 常識の更新

- 組織の適応モデル
- 4.1 尊皇攘夷
- 4.2 志士という名のアジテーター
- 4.3 適塾と蘭学の行方
- 4.4 幕末そして維新のあけぼの
(以上47巻3号)

II. 江戸時代の春夏秋冬

組織の適応過程

1. 春

- 1.1 最後の戦争
- 1.2 改易と浪人の激増 (以上47巻4号)
- 1.3 将軍と天皇

- 1.4 鎖国への道のり (以上48巻1号)

2. 夏

- 2.1 元禄時代
- 2.2 5代将軍綱吉と生類憐れみの令
- 2.3 赤穂浪士の忠義
- 2.4 芭蕉を生んだ元禄時代
(以上48巻2号)

3. 秋

- 3.1 常識の再検討
- 3.2 吉宗と田沼の政治手法
- 3.3 定信の目指したもの
- 3.4 本居宣長と国学の発展
(以上48巻3号)

4. 冬

- 4.1 大江戸ワンダーランド
- 4.2 鎖国から開国へ (以上49巻1号)

III. 江戸時代の意味するもの

1. 江戸時代と常識

- 1.1 鎖国と江戸時代
 - 1.1.1 春：鎖国の確立
 - 1.1.2 夏：鎖国体制の安定期
 - 1.1.3 秋：揺らぐ鎖国の常識
 - 1.1.4 冬：崩壊する鎖国の常識
鎖国はなかったか (以上本号)

1.2 参勤交代と江戸時代

1.3 米本位制と江戸時代

1.4 身分制と江戸時代

2. 江戸時代の盛衰

おわりに

*編集事務所南風舎顧問

Ⅲ 江戸時代の意味するもの

組織としての江戸時代の全体の流れを俯瞰する、つまり徳川幕藩体制の全体を組織論の方法によって読み解く。これが本論文の目標である。この目標を達成するには次の二つのハードルをこえなければならない。

1. 江戸時代を組織とみなすことは可能か。そして適切か？
2. 江戸時代の流れの全体像を捉えることは可能か？

第一のハードルについて。江戸時代は徳川幕府の下、鎖国や身分制といった種々の制約によって秩序づけられた人々の260余年にわたる営みとして見る事ができる。一方、組織とはもっとも広義では何らかのまとまりのある人々の集団である。したがって、江戸時代を組織とみなすことは可能である。しかし、それが適切か否かは、次の第二のハードルの検討から自ずと明らかになろう。

第二のハードルについて。組織論には組織一般の盛衰そして再生を理論的に説明するものとして組織の適応モデルがある。したがって、江戸を組織として捉えることができれば、江戸時代にこのモデルを適用することによって江戸時代の盛衰の全体像が得られる。

そこで問題となるのが組織の適応モデルである。これについては、本論文のⅠ. 4 常識の更新の「組織の適応モデル」の項にくわしく述べられている(『経営志林』第47巻第3号所収)。それによると、このモデルは、2つの考え方をベースにしていることがわかる。

まずこのモデルでは、組織にはそれぞれ固有の常識があり、それが組織としてのまとまりをもたらし、他方組織のかかわる環境を創造する。ここで「組織が環境を創造する」という事に違和感を覚える方もおられるようなので、少々くどくなるが具体例を示して説明しよう。あるクルマメーカーは、自らがかわるビジネス環境を食品でも玩具でもないクルマの生産・販売に自ら定めた。そして、クルマに関する諸々の事情、動向にその社の常識にしたがってある時は

無視し、ある時は対処してビジネス環境に働きかける。そして自らがかわって変えた環境にまたこのメーカーは、対処し・・・という事を繰り返しながらそのメーカーはビジネス環境を次々と創りあげていく。要するに、組織は常識を介して環境と相互に作用しあっているのである。そのため、同じ自動車産業に属していても各メーカーの常識、したがって対応の仕方が違うので、その結果として創造される環境はそれぞれ異なる。「組織がかわる環境」なる言葉は、環境とは他から与えられたものではなく、自らが主体的に創っていくものであることを強調した言葉なのである。

第2は、成長ゆえの衰退という法則である。古い常識に見切りをつけ、常識を一新した組織は新しい環境の下再び成長をし始める。成長を支えるには資源がいるが、その資源は有限だ。そのため、組織の成長もいつかピークを迎えやがて衰退してゆく。組織が衰亡をまぬかれ、再びよみがえるには、さらに常識を更新し、新しい環境のもとで、成長をスタートさせねばならない。組織の適応とはこうした盛衰のサイクルを繰り返してゆくことである。

この組織の適応モデルはまず主として企業組織の研究に適用された。その中で、特に組織論の分野にコミュニケーション戦略という概念を新たに提唱したり(遠田雄志「組織を変えるコミュニケーション」法政大学イノベーション・マネジメント研究センター『イノベーション・マネジメント』No.6(2009年3月)、組織の新しい類型化を提案した(遠田雄志「改訂・組織化の進化モデル vs 組織の適応モデル」明治大学経営学研究所『経営論集』第57巻第3号(2010年3月))。

そして今回初めて、江戸時代という歴史上のひとつのエポックにこのモデルを適用してみた。「組織論で読み解く 江戸時代(1)～(9)」は、われわれのこれまでの論考を記録したものである。

そのうちⅠ. 組織としての江戸時代 では、主としてこのモデルの構成概念とそれらの関係が実際の江戸時代のケースに当てはまるか否かが検討された。続くⅡ. 江戸時代の春夏秋冬で

は、組織の適応モデルから導かれる組織の春夏秋冬モデルが指し示す組織の盛衰が実際の江戸時代の盛衰に合致するか否かを検討した。

その結果、いずれの検討もパスし、このモデルが江戸時代を捉えるのにふさわしいことがわかった。

上述の検討作業の中で、まず常識という概念が江戸時代の政策や人物などを理解するうえできわめて有効であった。また、成長ゆえの衰退ということから示唆される、凸型曲線が、時代の流れの“潮目”を理解するのに有効なアイデアであることもわかった。

これらのことから

1. 江戸時代と常識

2. 江戸時代の盛衰

を2つの柱として、江戸時代の全体像を探ってみよう。

1. 江戸時代と常識

長い戦乱の世は、信長、秀吉に続く徳川家康が天下分け目の関ヶ原の戦いを制してようやく終わりを告げ、1603年江戸に幕府が開かれた。徳川幕府は乱の世に代わって治の世を永続させるべく大幅な意識改革、われわれの言葉では常識の刷新を断行した。

治の世が永続するには、まずその社会が安心できるものでなければならぬ。その点で、幕府にとって気になることがあった。外国人宣教師とキリシタンの執拗な活動とそこに秘められていると思われる我が国の植民地化の狙い。この危険に幕府はまずキリスト教を禁止し、貿易も制限し徐々に鎖国を常識にしていった。

海外との交易が著しく制限されると、わが国は自己完結な社会を持続していかなければならない。そのために、何よりも大事なのは主食の自給である。このため、江戸時代では米本位制が常識となっていった。

また治の世が永続するためにはそれが安定した社会でなければならぬ。開幕当初、徳川家が権力を握ったとはいえ、直前まで下剋上を常識として武勇をふるっていた諸藩の藩主があちこちに散らばっていた。このままでは、安定には程遠い。そこで、各藩主が幕府に恭順の意

を表し、代わって幕府が藩主に封土を安堵することによって、支配服従の関係を明確にするイベントが考案され、実行に移された。これが、儀式となったのが参勤交代でやがて年中行事となり、常識となっていった。

安定した社会はある意味で競争を排する社会でもある。この点で江戸時代が世襲と身分制を常識としたのはしごく当然である。

これら4つの常識は、組織としての江戸時代の安心と安定という点でそれぞれ当初は良く機能し江戸時代の成長に資していたが、次第に機能しなくなり、やがて社会の不安心、不安定をもたらし、江戸時代の衰退、崩壊の要因へと転化していくのである。総じて、常識はこうしたパラドックスを内包するものである（それは本論文I.4 常識の更新 の図4.2 適応的組織の推移（『経営志林』第47巻第3号2010年10月所収）に視覚化されている。その図によると、なるほどどの常識も前半は組織の成長を促しているが、後半は成長を抑えるどころか組織の衰退に拍車をかけている。

とはいえ、一口に常識といっても、4つの常識はそれぞれ成り立ちも異なり、支配者と被支配者の双方に対して果たした役割は大きく異なる。そこでまず、4つの常識の性格をあらためて略述しておこう。

●強制された常識：鎖国

ポルトガルの宣教師たちによるキリスト教の急速な浸透に危機感を抱き、幕府は、体制維持のためにはポルトガル人およびスペイン人宣教師の入国を禁止し、日本人の出入国をも禁じ、さらに貿易相手国を、布教には興味のないオランダと中国に限るいわゆる「鎖国」が不可欠の条件と考えた。これを徹底するため、特にキリスト教の禁止のために、火あぶりの刑をはじめとする残酷な刑罰をもって人々の心に恐怖心を植え付け、キリスト教の浸透を防いだ。つまり、鎖国を常識とするため、苛烈な強制を加え、過剰な教育をおこなったわけだ。

このため、「鎖国の常識」は国民全体に浸透したとはいえないものの、双方の合意のうえに形成された常識というよりは、体制の権力が直接

人々に強制的に押し付けた一方的な強制された常識であったといえよう。この場合人々は上からの命令に対して一方的に従うしかなかった。押し付けられた人々は、納得という手続きなしに、一方的に従わされた。人々はキリスト教という言葉を知りただけで、恐怖を感じる状況が作りだされた。しかも、これは、踏み絵などの手段を使って、幕末まで、厳格に続けられた。つまり「鎖国の常識」は権力者が強制した常識であった。したがって、常識を共有したといっても、一方が他方に強制した常識なのである。しかも、強制されたのは、被支配者のみならず、強制した幕府側もその常識に取り込まれ、新しい情報を得る努力を怠り、ついには、視野狭窄に陥ってしまった。この時代の国民全体が鎖国という常識の中に閉じ込められてしまったのである。

鎖国は単なる徳川幕府の外交政策とみなすべきではない。それは江戸時代の常識として外部から人々の行動を縛ったのみならず、人々の心の中に深く浸透して内部から人々の意識や思想を縛ったのである。これを徹底するため、幕府は人々を仏教寺院に登録させる寺請制度を作り、事実上仏教を国教とした。寺院は檀家として住民を組織し、年中行事や追善供養などの仏教行事に組み込んでいった。それは、なによりもキリスト教を排除することが狙いであった。しかも、鎖国はさらに出入国を禁止したりして、日常的に人々の意識と行動を拘束していったのである。

●合意の常識：参勤交代

参勤交代は藩主の奥方を人質にとる人質策との抱き合わせを特色としている。藩主は2年に一度江戸へ参府して将軍に挨拶しなければならない。当初は幕府が藩主に強制したものであるが、中央と地方の権力が体制維持のために相互に必要性和その利益を認識し、一種の軍事パレードとして大名行列が始まった。

幕府としては、地方の外様藩の経済力を削ぐために、膨大な出費をさせる目的もあったが、地方の藩としては、藩の力を誇示するため必要以上に華美になる傾向があり、藩の経済的負担

は大きかった。しかし、藩の側にも一定の人数を常に江戸に常駐させることができる制度であり、中央や他の藩の情報入手する上で大きな利点があった。このため、中央、地方の双方が合意の上で維持されたものである。

つまり、参勤交代は幕府と諸藩の間の合意のうえで形成された常識であった。ただし、あくまでも武士同士のとりきめであり、農民、商人など庶民には関係のないものであった。だが、街道筋の旅籠をはじめとする商人や、江戸の商人たちは経済的に潤うという副次的な恩恵にあずかった。なにしろ、全国から非生産的な大勢の武士が常に江戸に滞在したのである。これが江戸の消費経済を牽引していたのはまちがいない。二百数十の藩が隔年に出府するのだから、半分つまり百以上の藩から参勤交代で江戸へ出て来た武士たちが長期にわたって江戸に滞在するのである。じつは、江戸の繁栄は参勤交代が支えていたと言っても過言ではない。

したがってこれは、中央の権力と地方の権力の合意の上に形成された合意の常識と考えられる。このため、幕府と藩の間に参勤交代をめぐるいざごさはほとんどなかったし、平和的に維持された。世界的に見て極めて特異な大名行列が幕末ぎりぎりまで維持されたのは、こうした双方の利害の一致した合意の常識だったからである。

●建前の常識：米本位制

百姓から取り立てる米によって武家政権を維持するという構造が徳川幕府の経済の基本にあった。経済の中核を年貢米によって把握しようとするのである。武士を養うために百姓から取り上げた年貢の米で給料を払う。しかし、武士にとっては食べる米の他に米を売った金銭で他の生活物資を購入しなければならない。したがって米はいったん金銭に交換される必要があった。

生産活動としては、米が主食であることや米を作る以外ほとんど考えられなかった江戸初期には、それも妥当性をもっていたが、時代が進み、米以外の生産活動が拡大し、豊かになった生活には多様な出費が必要になっていった。

そうなると、米本位制は次第に経済の実態から乖離していった。

皮肉なことに、開拓や灌漑設備の整備などのために、江戸中期までに米の生産量が激増すると、米価は下落し、武士の収入は減少してしまったのである。

しかし、幕府は収入を増やすため、代官を通してますます熱心に年貢を取り立てたが、年貢の取り立てそれ自体が目的化してしまった。

建前としては年貢という制度は維持されたが、それだけでは経済の全体は把握できず、米を含むすべての生産物が貨幣に換算されて、流通しはじめ、その流通と貨幣経済は商人に握られてしまった。経済の実態は米を本位とする幕府の手からますます離れていった。

米本位の建前は維持されたものの米本位の財政運営は崩壊寸前のところまできていた。したがって、実態は貨幣経済が浸透していたが、建前は米本位を貫ぬくという建前の常識となってしまう。

こんな状況が構造的に人々を縛っていたから、地位の低い町人は裕福だが、権力を持ちながら武士は貧乏という本末転倒の状況が続いた。本来はそこで間違いに気がついて、経済構造の基本を見直さなければならないのに、反対にその状況を正当化し、自分を納得させるため、「武士は食わねど高楊枝」とやせ我慢をした。また、思想家たちも「貴穀賤金」を説き、金銭に囚われることを戒めた。つまり、貧乏を哲学的に正当化してしまったのである。金銭に清いというのは、日本人の美点として今日まで残っているようだが、経済に疎い困った指導者が多いことも事実である。長いこと建前の常識に縛られて、実態を冷静に観察し、自由な発想で状況を切り開くことができなくなってしまったからである。

日本の男性はいまだに給料袋をそっくり妻に渡し、家の経済を妻にまかせていることが少なくない。英国人の女性と結婚した日本男児が、里帰りして、ロンドンのレストランで妻に支払いをさせたところ、姑に非難されたという話がある。妻に払わせるとは何事かというのである。イギリスでは家庭の財布は夫が握っているのが

普通だし、それが常識らしい。

ところが、日本では現代の企業戦士たちでも金銭にこだわることを恥として、家計を妻に預けている気配がある。

これなども、江戸時代の貴穀賤金の思想が尾を引いているためともいえるだろう。換言すれば、江戸時代の米本位の常識が建前として通用していた名残かもしれない。ことほど左様に常識は変わりにくいのである。

●過剰反応の常識：身分制・世襲

戦国時代にはそれまでの身分にとらわれず強いものが上にのぼることができた。長年にわたって築かれてきた秩序は崩壊し、一介の百姓でも天下を取ることもできた。百姓が侍大将を夢見て鍬を捨てて槍を取って戦場を求めて走った。弱肉強食の時代である。

そのため、国中が戦場と化し、人々は疲弊した。次第に人々は平和と安定を求めるようになった。そしてついに、下克上とは正反対の身分制、それもかなり厳格な身分制と世襲が常識となった。この新たな常識はいわば下克上にこりての過剰反応の産物なのである。

天下をとった秀吉は刀狩りを行い、百姓と武士を峻別した。士農工商と4つの階級が語られるが、基本は百姓と武士である。商と工は士農に奉仕する副次的な階級にすぎなかった。少なくとも江戸時代初期にはそうであった。こうして武士を頂点とする身分社会の秩序ができあがった。

しかし、時代の進行とともに商人が経済を握るに至って、上下の関係がタテマエとしての常識と乖離してきた。武士は権力と武力を握っているものの、経済をコントロールできず、貧困に泣かされる支配階級というアイロニーが常態と化した。幕末には、身分を金で売ることすら行われた。支配階級が尊敬されず、落語などでは武士が笑い者にされるという、規律なき組織の実態がさらけだされた。

しかし、武士は気位だけは高く、あこがれの対象であったことは確かである。

貧しい百姓の子、伊能忠敬は、佐倉の商家に養子で入り、努力の末、家業を立て直したのみ

ならず地域に貢献し地域の人望を担った。しかし、50歳で家督を譲って隠居すると、江戸へ出て好きな天文学を学んだ。その延長で測量をこころざし、簡単な道具ながら生真面目に測量を続け、地図を作成するが、その地図の高い精度が認められて、ついには幕府から日本地図の作成を命ぜられるに至る。はじめは忠敬の身分はあくまでも百姓であったが、やがて幕臣に取り立てられ、幕府の権力を背景にして日本全体の測量をなしとげた。

忠敬の肖像画を見ると端然と座った膝の前に刀を置いている。武士の象徴である刀とともに肖像画を描かせるというのは、百姓から出た忠敬にとって夢のような話だったにちがいない。武士は貧しかったとはいえ、やはり気位は高く、あこがれの存在だったのである。忠敬の肖像画に描かれた刀は、そんな身分制のなかで功成り名遂げた一人の男の誇らしい気分をよく表している。

武士階級は家の後継者を実力ではなく長男による世襲を原則としたが、このため、將軍の継承権をめぐる権力闘争は和らげられたものの、無能な君主という権力の空洞化が避けられなくなった。これは当然、権力の弱体化を招き、組織の崩壊に行き着いた。自ら墓穴を掘っていたのである。

百姓も長男のみが一切の財産を相続し、次男、三男は家から追い出されるのが常識であった。農民は田畑を分割してしまうと、家が成り立たなかったからである。また、長男が家長として君臨し、次男、三男は独身のまま作男のように働く地方もあった。

これに反して商人が、世襲という常識に捉われる事なく、実力本位に家の相続者を決定していたのは、合理的な判断であった。商人は階級構成の最下層に位置していたため、武士の常識に縛られる事なく自由な判断ができたのである。こうした面からも商人が次の時代を担うことになるのは当然の成り行きであった。

1.1 鎖国と江戸時代

徳川幕藩体制の260年間、戦乱のヨーロッパを尻目に、日本は鎖国という静かな眠りについ

ていた。それは偶然もたらされたものではなく、まるで必然のように世界の情勢がもたらした結果ともいえるものであった。

近世のヨーロッパが大規模な領土の拡大運動を行ったことが二度あった。一度目は16世紀、スペインとポルトガルが主役となり、インドへの西回り航路の発見を契機として、冒険家とキリスト教の宣教師が先陣を努めた。この時代に南北アメリカ大陸が「発見」され、先住民民族が追われ、インカ帝国が滅ぼされた。こうして、南北アメリカ大陸がヨーロッパの支配下に入るといふ世界史上の一大転機となる大変動のきっかけをつくったのである。

彼らは、アジア各地でも、マカオ、ゴアなどの拠点を作っていった。この時期を一度目の山とすると、二度目の山は19世紀、イギリスが主役となって進められたものでアヘン戦争を画期とする植民地争奪の争いであった。この時期、インドに続いて中国も半植民地になり、インドシナのベトナム、ラオス、カンボジアがフランスの植民地となった。

江戸時代は、ヨーロッパのこの二度の大拡張時代の間の比較的穏やかな時代に奇跡的に存在できた。あたかも二つの山の間にかけてわたされたハンモックの中で眠り続けた絶滅危惧種のような文明のひとつだった。

この時代、ヨーロッパ諸国は30年戦争からナポレオン戦争へと存亡をかけた死闘を繰り返していたのであった。

もちろん、日本はこの状況の中で無為に安眠をむさぼってきたわけではなく、主体的に自分の意志で環境を選びとり創り上げてきた結果だったのである。

この二つのヨーロッパの拡大運動は、実はかなり性格の異なるものであった。一度目の山は主としてキリスト教の宣教師による布教活動が先陣を切っていた。これに対して幕府はキリスト教の禁止をかかげて対抗した。貿易の制限や人の出入国禁止はあくまでもそれに付随するものであった。オランダと中国にのみ通商を許す鎖国体制は、キリスト教を排除しながら通商活動を行うためにやむをえず定めた制度であった。

しかし、二度目の山は主としてオランダ以外の国々による交易の再開を求めるものであった。それは18世紀にヨーロッパで進んだ産業革命の結果、過剰に生産された商品の捌け口を求めるものであった。さらに彼らは産業革命の結果手に入れた圧倒的に強大な鉄の船、蒸気機関、強力な大砲などの武力を用いて強引に日本の開港をせまった。

つまり、一度目の山はキリスト教の布教、二度目の山は交易の再開を主要なテーマとしており、明確に性格の違いがあったのである。

幕府はこの一度目の山に対して鎖国体制を築くことにより将軍以外の権威を排除することに成功し、一枚岩の徳川幕藩体制を築くことができた。

しかし、200年後に二度目の山が来たとき、徳川幕府は、一度決めた鎖国の方針を振りかざして、二度目の山の新しい状況に対処しようとしたため、その対応に苦慮した。鎖国はあくまでもキリスト教の浸透を防ぐことが目的であったにもかかわらず、交易の再開要求に対しても鎖国は祖法ゆえとして既定の方針通り交易拒絶の姿勢を貫いたため、環境をいっそう厳しいものにした。一度決めた方針が常識として定着していたため、常識が非常に強い支配力を発揮したからである。

鎖国の常識はいかにして成立したのか、それは徳川幕藩体制の成立とどうかかわったのか。また、鎖国の常識はどう確立し、体制の維持にいかなる影響を与えたのか。そして最後に鎖国の常識は幕藩体制の崩壊にいかなる作用をしたのか。

以上の視点から、鎖国の常識は江戸時代の盛衰にいかに作用したのか、以下、江戸時代の春夏秋冬にそくして見てゆこう。

1. 1. 1 春：鎖国の確立

織田信長が保護し、各地にキリシタン大名まで現れるにいたると、キリシタンは急速に各地に増加していった。ひと頃は全国で70万人の信者がいたといわれている。

信長が倒れ、秀吉がキリシタンに対して否定的な態度をとるに至ったきっかけは、世界各地

でポルトガルが宣教師と結託して領土を拡大しているという情報に接したことであった。そればかりではない。神に対して絶対的な帰依を表明するキリシタンは全国制覇を進める支配者にとってはやっかいな存在だった。秀吉の政策を受け継いだ家康はキリスト教の弊害と海外貿易の利点を天秤にかけながらも、キリシタンが幕府の中枢にまで浸透している事態に驚き、その危険性を認識し最終的に弾圧に転じた。

二代将軍秀忠、三代将軍家光は家康の方針を受け継いで禁教の政策を進め、ついに、宣教師の追放、ポルトガルとスペイン船の入港禁止、大名による大船の建造禁止、日本人の出・入国禁止へと進んで行った。いわゆる鎖国の完成である。貿易はオランダと中国商人にのみ許され、オランダ人は出島に閉じ込められ、中国人商人の居住地も長崎の唐人屋敷に限られた。

家康は政治顧問として、三浦按針、ヤン・ヨーステンらヨーロッパ人を身近に置いて、世界情勢にも気を配っていたが、秀忠、家光の代になると、その関心はもはや国内に限られていた。彼らは海外情勢や貿易に興味を示すこともなく、鎖国政策に迷いはなかった。

宣教師の去ったキリスト教徒は次第に信仰も薄れていったが、九州とくに天草、島原はキリシタン大名のもと、キリスト教が深く浸透していた。そこへ、赴任した新たな領主の過酷な収奪が大規模な反乱を招いた。百姓一揆とキリシタンの宗教一揆が合体し、しかも改易されたキリシタン大名のもとを離れた浪人たちが合流して戦闘能力をもった大勢力を形成した。天草四郎をシンボルとして、江戸初期最後の武装闘争が起こった。島原の乱である。幕府も最大限の武力を投入して苦心の末彼らを殲滅し、さしもの反乱を押さえ込んだ。これを最後にキリスト教徒の組織的な抵抗は終わった。各地に潜伏したキリシタンも探し出され、火あぶりなど見せしめのために残酷な刑に処された。

アユタヤ、ブノンペン、ジャワなどアジア各地に設けられた朱印船貿易の拠点もかつての繁栄を忘れたかのように次第に寂れ、残された日本人は帰国が許されず、やがて音信も途絶え、ジャカルタに残された最後の日本人お春はじゃ

がたらお春として、かの地で寂しく生涯を終わった。

幕府は鎖国を完成し、これ以降幕府に対抗する武装闘争は起こっていない。一揆は数多く発生したが、武器をとって戦うことはなかった。

海外からの情報はオランダ商館長から毎年もたらされる「風説書き」という報告書と輸入される書籍に限られた。洋書は主として漢訳されたものが中国商人によりもたらされたが、キリスト教に関するものは禁じられ、少しでもそこに触れたものは禁書とされた。このため、歴史、哲学等の社会科学書、文学書はほぼ禁書とされ、中国語に訳された天文学など自然科学書のみ許されて輸入された。

鎖国体制は常識となって民衆の中に浸透し、それが当然とされていった。こうして最も厄介な抵抗勢力を一掃して幕藩体制は安定し、民衆は平和を享受した。

この時期、鎖国の常識はますます強化され、江戸幕府はますます安泰となったのである。

1. 1. 2 夏：鎖国体制の安定期

オランダ商館長は幕府の要求に従って、大名のように、毎年(1790年からは4年に1回)忠実に江戸参府を行い、対日貿易を独占して甘い利益を独占した。その他の国がそこへ干渉することもなく、宣教師ももはや日本への渡航の情熱を失っていた。

将軍をはじめ、人々は海外への関心を失い、もっぱら国内の出来事に興味を向けていた。5代将軍綱吉のもと、上方を中心に経済が活性化し、華やかな元禄文化が開花した。それは、鎖国ゆえか、我が国独特のきわめてユニークなものであった。

また、綱吉は儒教を熱心に奨励し、忠義の観念を国のすみずみまで浸透させようとした。武断政治に代わって儒教の道徳が社会秩序の形成に利用されたのである。生類憐れみの令という世にも奇妙な法令が連発されたのも、安定した国内の状況と無関係ではない。かなり常軌を逸した政策ではあったが、殺伐とした戦国時代の気風が薄れ、命を大切にしようとするこのころの気分が底辺にあったことは確かである。

宣教師シドッチェが日本人に変装して屋久島に上陸したのは、こんなころであった(1707年)。すでに鎖国が始まって60年がたっており、幕府もその対応に苦慮した。その時、宣教師の尋問を買って出たのが6代将軍家宣のもと将軍侍講として実権を握っていた儒者新井白石であった。

白石はシドッチェを江戸に呼び寄せ、キリスト教に限らず自然科学、地理、天文学にまで及ぶ広範な疑問をぶつけてシドッチェの尋問を続け、シドッチェは白石の質問に的確な回答を与えて白石を驚かせた。慣例からすれば、拷問して改宗させ、場合によっては死罪とすべきところを、白石はシドッチェの教養と知識の広さと深さに感服し、彼の知識をどん欲に吸収し、その延命をはかった。

また、その聞き書きに基づいて『西洋記聞』を執筆し、西洋諸国の歴史、地理、宗教などについて書きのこした。もとより出版の意図はなかったが、それから100年後に注目され、回覧、筆写されて普及した。白石にとって、シドッチェは鎖国によって閉ざされた国に射し込んだ微かな海外情報の光だった。しかし、当時の人々はそこに気がつくことはなかった。鎖国の常識はまだ強固に人々を支配し、揺らぐことはなかったのである。白石のような先覚者だけが、かすかに常識の外の世界に気がついたというだけで、それが広がることはなかった。夏の時代の最後に起こったのはただそれだけであった。

この時代、鎖国の常識は強固であり、体制は安定していた。

1. 1. 3 秋：揺らぐ鎖国の常識

吉宗が8代将軍になったころ、幕府の金庫は枯渇し、幕臣に支払う禄米に窮する状態になっており、幕藩体制の維持に深刻な不安が漂っていた。吉宗という強力なカリスマ性をもった将軍の誕生には大きな期待がかかっていたのである。

吉宗は、期待に応じて大胆に法体系の整備を始め、独自の調査に基づいて数々の新政策を打ち出した。その一連の政策は享保の改革と呼ばれている。しかし、鎖国という視点から見て興

味深いのは、吉宗が西欧の文明に興味を持ち、その文物を積極的に輸入したことである。なかでも、象を輸入して、江戸まで連行して日本中の人々を驚かせたり、さらに天体気象観測の機器など珍奇なものに興味をもち次々に取り寄せた。吉宗は常識にとらわれることなく旺盛な好奇心のおもむくままに振る舞ったものと思われるが、人々はこの時、日本の外に未知の世界、未知の文明があることを知った。

吉宗が興味を示したのは、科学技術関連の文物が中心であったが、さらに重要なことは青木昆陽と野呂元丈を長崎に派遣して、オランダ語を学ばせたことである。なぜなら、ここから、後の蘭学研究がはじまったからである。鎖国の常識の視点から見れば、吉宗が鎖国の常識をゆるがす蘭学発展のきっかけをつくった点を高く評価しなければならない。

これを受けて蘭学の飛躍的な発展をうながしたのは、田沼意次であった。田沼の時代、人々の新奇なものに対する旺盛な好奇心が発揮され、前野良沢、杉田玄白、平賀源内、大田南畝、林子平など天才奇人が続出した。

杉田玄白らが解剖書ターヘルアトミアの翻訳『解体新書』を出版できたのも田沼時代のこんな風潮があったからである。これが蘭学のさらなる大発展のきっかけとなった。江戸において蘭学者たちが集まっておらんだ正月を楽しんだのは文化文政時代であった。そして蘭学の発展は、医学をはじめとして、西欧の科学技術の導入に大きな筋道をつけることになった。

蘭学者たちのこうした努力は鎖国の常識への疑いを生み、彼らの交流はその疑いを増殖し、ますます鎖国の常識を揺るがす力になっていった。

シーボルトが長崎オランダ商館の医師として出島へやって来たのはこんな時代であった。シーボルトの目的は未知の国日本の探索であったが、西洋の最新の医学知識を求めて全国から医師やその卵が集まり、シーボルトに入門した。シーボルトは他のオランダ人とは一線を画して大幅な自由を与えられ、長崎郊外の鳴滝に塾を開くことを許された。シーボルトは体系的な医学の教育を施しながら、教え子たちに課題を与

えて日本に関する膨大な資料を収集することに成功した。弟子たちは西欧の学問に直接接して、医学をはじめ西洋に関する学問に大きく目を開かれたのであった。

日本を去るにあたって、国禁の伊能忠敬の日本地図を持ち出そうとして発覚し、出島に1年間軟禁されるとともに多くの協力者を犠牲にした。まだ鎖国の常識は力を持っていたのである。

また、このころ、ロシア、イギリスなど西欧諸国の船が日本近海に出没し、水や食料の補給を求めたり、さらには通商を要求することも始まった。鎖国日本を揺さぶる圧力が増してきたのである。

鎖国の常識は日本の範囲を松前藩までとじていたが、ロシアの南下に備えて田沼意次は蝦夷探検を試み、さらに大規模な北海道の開拓を計画した。そこまで視野が広がったのである。

こうした外圧に対処するため、日本は国境を確定する必要に迫られた。伊能忠敬が日本全土の測量の結果精密な日本全図を作成したのは、はからずもこの時代であった。

鎖国の常識にもっとも苦しめられたのは船乗りであった。江戸時代前期までは、物流の大動脈は波の静かな日本海の沿岸を走行する北前船であった。しかし、江戸と大坂の物流が増加するに従い太平洋側に乗り出す船が増加していった。しかし、太平洋は黒潮と台風のために船にとっては難所であった。船乗りは危険を犯して乗り出し、多くの船が遭難した。鳥島や青ヶ島に漂着して救助されるものもあったが、そこでむなしく船を待ち続けて生涯を終えるものもあった。また、江戸時代も後期になると、アメリカの捕鯨船がこの海域に多数現れ、彼らに救出されるケースが増えた。しかし、鎖国日本は出入国禁止令によって、いったん漂流した船員を受け取ろうとしなかった。このため折角救助されても帰国できず異国で泣き暮らすものもあった。

大黒屋光太夫は漂流したあげくロシアに流れ着き、10年に及ぶ苦難の旅のすえ、奇跡的に日本に送り返された。アメリカ彦蔵は漂流のすえ、アメリカの捕鯨船に助けられ、アメリカで教育を受け、のち帰国して、通訳、英字新聞

の発刊、貿易などで活躍した。彦蔵は鎖国の犠牲者だが、そのためにたぐい希な体験をしてチャンスをつかんだ。しかし、それは例外で、多くは悲惨な目にあっている。

漂流民が多くでたのは、太平洋の荒海を航海しなければならぬのに、幕府の大船禁止令により一本マストの貧弱な船で太平洋に乗り出さなければならなかったからである。

日本のかかわる環境は、鎖国という常識にとっていよいよ厳しいものとなり、その根幹を揺るがすまでになっていたのである。それは、国内的には幕藩体制の危機にも対応していた。吉宗の享保の改革に始まって、定信の寛政の改革、水野忠邦の天保の改革と矢継ぎ早の「改革」が続いた。しかし、それらはいずれも対症療法にすぎず、鎖国の常識と大きく変わった環境とのギャップを埋めることはできなかった。鎖国の常識はもはや徳川幕藩体制の足枷となってしまうのである。

鎖国の常識が揺らいできたとき、幕藩体制も揺らいできたのである。

1. 1. 4 冬：崩壊する鎖国の常識

鎖国の常識に決定的な打撃を与えたのは、強大な武力を誇示しながら江戸湾に侵入して、開国を迫ったペリーの黒船であった。

開国か鎖国か。幕末の日本はこのテーマを巡って争乱状態に突入した。

ペリーの黒船に小舟を漕ぎ寄せて密航を迫った吉田松陰の行動は、この時代の人々の矛盾した気持ちをよく示している。西欧諸国の圧力に屈したくはない、しかし彼らの進んだ文明を学び取り入れたい。

ここに奇妙なスローガンが発生し一世を風靡した。「尊王攘夷」である。鎖国の常識を逆手に取って幕府を追いつめる、幕府にとってはなんともやっかいなスローガンであった。

長州藩は激しく尊王攘夷を唱えながら、密かに英国へ留学生を送り込んだ。薩摩は江戸から遠く幕府の目が届かないのをよいことに、西欧の技術を導入して近代産業を起こしていた。

薩長両藩のこうした矛盾する思考、行動は、広く深く浸透した鎖国の常識が人々を縛ったま

ま、しかし、世界の情勢はもはや鎖国を許さないところへ来ているという認識も広がってきた証左である。

対外的な交渉の前面にたち、海外の情報を豊富にもった幕府は開国に舵をきらざるをえなかった。しかし、いままで、鎖国にこだわっていた幕府としては、尊王攘夷を唱える志士たちの突き上げに困惑することになる。単なる政策なら変更することはできても、長年に渡って人々の心に染み付いた常識を塗り替えることは至難の技だった。しかもその常識は幕府が人々に強制したものであったからなおさらであった。

幕末の日本は開国か鎖国かをめぐって争われ、開国派の幕府が鎖国派の西南雄藩に敗北した。ここにもっとも劇的な歴史のパラドックスを見る事ができる。強固な常識を覆すために仕組まれた壮大なドラマだったのである。

この時期、日本各地の蘭学塾は隆盛を極め、多くの人材を送り出した。最も注目されるのは大坂の緒方洪庵の適塾であった。日本中から意欲的な若者が集まり、オランダ語を習得しながら洋書を研究し、優れた人材を送り出した。福沢諭吉、大村益次郎、橋本左内、大鳥圭介など明治維新に活躍する重要人物がこの適塾から出ている。幕末、蘭学は内側から鎖国を突き崩す力をいよいよ発揮したのである。

以上をまとめてみると、徳川三代将軍までの江戸時代の春には、鎖国の常識は幕藩体制の強化に非常に有効であった。五代将軍綱吉に象徴される夏の季節には鎖国の常識は揺らぐことなく幕藩体制も盤石であった。八代将軍吉宗が象徴する江戸時代の秋には鎖国の常識に疑いが芽生えるとともに幕藩体制も動揺し建て直しのために必死の努力がみられた。江戸時代の冬の季節になるともはや足枷と化した鎖国の常識を逆手にとって尊王攘夷のスローガンをかかげた反幕府勢力によって幕藩体制は引き倒され、江戸時代は終焉を迎えた。

このように見てくると、鎖国の常識は当初、幕藩体制の隆盛をもたらすが、やがて衰退の要因と化してしまうことが明らかになったのでは

ないか。

鎖国はなかったか

以上検討してきたように、我々の研究では、鎖国の常識は江戸時代の基本的な骨格を形成していると考えられるのだが、近年鎖国はなかったとする議論が流行しているので、最後にその議論についても検討しておこう。

彼らの論点は主として二つある。一つ目は鎖国という言葉は江戸時代にはなかった、鎖国という言葉は1690年に長崎に来たケンペルが、帰国後著した『日本誌』（1727年）の中で触れられている言葉であり、それが幕末になって長崎の通詞、志築忠雄によって訳されて、それから広まった言葉である。それまでは日本には鎖国という言葉はなかったし、幕府も鎖国という言葉を使ったことはないし、1635年ころに始まった状況を鎖国と言ったことはなかった。従って鎖国はなかったというものである。

二つ目は、そもそも江戸時代に日本は国を閉ざしていたわけではない。オランダと中国との間で正式に貿易が行われていたし、オランダからは毎年風説書という世界情勢の報告書が幕府に提出されていた。さらに、朝鮮は将軍の代替りの際など合計12回幕府に通信使を送り、このため東海道を行進し途中の行路で交流が行われていた。また、オランダはほぼ毎年江戸参勤を行い、途中の宿場や江戸の宿舎には医師等が来てかなり自由に情報の交換が行われていた。つまり物も情報も入っていたというものである。

一つ目の議論はかなり幼稚としかいいようがない。言葉がなかったからそんな状況もなかったという、そんな議論は成り立つわけがない。問題はそんな状況があったかなかったかである。言葉があったかなかったかは二の次三の次である。それに当時言葉がなかったのなら、その状況を的確に表現できる言葉はあとからつけければよいのである。鎖国という言葉がいつ登場したかはどうでもよいことである。したがって、一つ目の議論は問題外としか言いようがない。

二つ目の議論だが、まず、幕末の開国が攘夷かをめぐって流されたおびただしい血はいったいなんだったのか考えてほしい。漂流したために帰国がかなわなかった船乗りたちの無念を考えてほしい。また、国際慣例の無知から開港後の治外法権など不平等条約を結ばされ、これに長いあいだ泣かされたことをいったいどう考えればよいのか。それには、貿易も情報も極めて断片的で偏ったものであり、人の出入りはまったく閉ざされていたことを指摘すれば十分であろう。

ここでは、鎖国の善悪を問題にしているわけではない。よい面もあり、悪い面もあった。

つまり、江戸時代の対外関係とその結果生じた状況がいかなるものであったかが重要なのであって、その名称が鎖国で何の問題もない。鎖国という名称は多少きつ過ぎるかもしれないが、これまでのところ、それ以上にふさわしい名称はないし、鎖国という言葉が最適であると考えられる。

鎖国はなかったという議論は、問題を矮小化しているのである。

われわれは、江戸時代にオランダ以外の西欧諸国が日本に入れなかった状態、唯一許されていたオランダ人さえ長崎の出島に閉じ込められていた状態、自由に貨物や書物を輸入できなかった状態、大きな船を建造することを禁じられ、国を出ることも入ることもできない状態、さらに漂流しても帰国が許されない状態、こういう状態を表現するには鎖国という言葉がもっとも相応しいと考えるのである。

江戸時代の人々は皆、こうした状態を当然のこととしていた。そこで、われわれは鎖国をさらに江戸時代の人々の思考や行動を規定する“常識”として捉えた。それによって、江戸時代の流れが単なる鎖国の政策や現象からではなく、常識としての鎖国という一層深いところから考察されたのではないか。

【参考文献】

- 石井寛治（1993）『大系日本の歴史12 開国と維新』小学館ライブラリー
市村佑一・大石慎三郎（1995）『鎖国・ゆるやかな情

- 報革命』講談社現代新書
犬塚孝明 (2011) 『海国日本の明治維新』 新人物往来社
井上勝生 (2009) 『日本の歴史 18 開国と幕末変革』 講談社学術文庫
岩生成一 (1974) 『日本の歴史 14 鎖国』 中公文庫
小倉貞男 (1989) 『朱印船時代の日本人』 中公文庫
加藤祐三 (1988) 『黒船異変』 岩波新書
小西四郎 (1974) 『日本の歴史 19 開国と攘夷』 中公文庫
辻達也 (1974) 『日本の歴史 13 江戸開府』 中公文庫
中村彰彦・山内昌之 (2008) 『黒船以前』 中公文庫
中村彰彦・山内昌之 (2009) 『黒船以降』 中公文庫
松本健一 (2012) 『日本の近代 1 開国・維新』 中公文庫
三谷博 (2003) 『ペリー来航』 吉川弘文館
ロナルド・トビ (2008) 『日本の歴史 9 「鎖国」という外交』 小学館